

アルピニスト野口健二郎より

「福島第一原発20キロ圏内の世界」

六月二十日、早朝、私は高邑勲議員

(民主党・衆院議員)と福島原発20キロ

圏内(警戒区域)に向かった。高邑議員と

は以前から遺骨収集活動で「縁があり、エ

ベレストから帰国後に再会した際に「野口

さん、20キロ圏内に取り残されている家

畜が政府の方針により殺処分されている。

私は何度も現場に通っていますが、あの動

物達の鳴き声が耳から離れないんです。何

とか助けない。殺さずに生かしていく方法

があるはずですよ」と訴えていた。(中略)高

邑氏は原発事故後から今日までほぼ毎週、

福島県の被災地に通い続けている。高邑氏

の故郷である山口県上関町に建設が予定

されている上関原発について考えてみたい

と思つたのがきっかけのこと。しかし、気

が付いてみたら既に四十八日、福島に通い

続けていた。その高邑氏が「野口さんの言

う、見る事は知ること。そして知る事は背

負うこと。その言葉の通り、私は20キロ

圏内で見えてしまった。そして背負つてしま

たのです。だから何が出来るのだろうか

現場に通い続けているのです」と私にお話

しく下さつた次の瞬間、「高邑さん、私も同

行させてください」とお願いしていた。

20キロ圏内は警戒区域内。勝手には

入れない。南相馬市から許可を頂き六月

二十日、現場へと向かったのである。防護

服に身を包み、警察官の検問を受け二十

キロ圏内へ。まず向かったのが豚舎。豚舎の

入口に車を止め、降車したその瞬間にツ

ンとした臭い。豚舎から数十メートル離れ

ているにも関わらずこの異臭。豚舎のドア

を開けようとしたがしばらく誰も開けてい

なかつたのか、簡単には開かなかつた。ギギ

ギと音を立てながら開いたドア。中は薄暗

くそして目が沁みるような強烈な腐敗臭。

中を歩くとプチプチと音がする。足元を

見ると地面は一面がウジ。そのウジを踏み

つぶしながら歩いていったのだ。驚いたのは豚

舎の檻の中に生きている豚がいた事だ。

そして檻の中へと視線を移すとそこは豚の

死骸の山。顔面がウジだらけの豚や肉の間

から肋骨などの骨が露出している豚の遺体

が。多くの豚は餓死していたが、それでも

生き延びている豚たちもいた。3カ月間、

水も食糧も与えられずにそれでも生存し

てきたのは、豚が豚の死骸を食べていたか

らだ。糞尿にまみれ、また腐敗しドドロ口

なつたウジだらけの死骸を食べている豚の

姿に、吐き気に襲われ豚舎から出て胃液

を吐きだしていた。腐敗臭が身体に染みつ

き臭いが離れようとしれない。ここはまるで

戦場だ。生き延びている豚たちがジツと

希望の牧場プロジェクト

災害で失ってしまった命、その命を思う今を生きる人々。そして、置いていかれてもおおきいている動物の命。福島第一原発の警戒区域となっている二十キロ圏内には、いまなお、多くの動物が取り残されており、このままでは餓死か安楽死(殺処分)しかありません。

「殺してしまうのでなく、いかすことはできないか」

その命を思う、関係者や多くの日本人、世界の人たちの思い。それに対して私たち日本人はどうあるべきなのか、どうすべきか？ 答えは一つではないかもしれませんが、とにかく目を逸らしてはなりません。無意味に殺されそうになっている命を守り、保護。そして、いかすために 当プロジェクトでは、あらゆる方策を講じてまいります。

「私は330頭の牛たちを置いて逃げることはできなかった」

震災発生後、空には5・6機のヘリコプターが飛んでいた。

すごいことが起きているのではないかと・・・

避難が始まっていることを知ったのは、車のカーナビのTVだった。エム牧場はもちろん、近くの牛舎においても同じように電気が止まり、乳牛の乳が搾れない、水をくみ上げることができないという状況の中、発電機を使ってどうにかできないかとがんばっていたが原発の連続的な爆発事故の状況は、ますます悪化。

親しい酪農家はやむを得ず避難をするという苦渋の決断をせざるを得なかった。

「出荷できないと分かった時はとても無力感に襲われたが、絶対に見殺しにしないと決めた」と

エム牧場の村田社長が決めた信念に吉沢さんは希望を持って震災後も、草が伸びるまでの間、3日に一度は牧場に入り餓死させないようにご自身の体、命と引き換えに餌をあげに通った。

季節が春から夏に変わるとおいしい草が生えてきたため餌やりは一週間に一回程度に。



親しい酪農家は、ご近所に迷惑になるから牛をつないだまま避難した。置いてきた牛のことを考えて避難所で泣いていました。同じ牛飼いとて、私は彼らの無念がよくわかる。

だからこそ、浪江のエム牧場を復活させ、希望になりたい。

「私の残りの人生をかけて戦う」と吉沢さんは力強く声をあげてく

我々を見つめてくる。言葉は発しないが、しかし彼らの寂しげな眼差しが「助けてほしい」と私たちに訴えかけているようだった。檻から放すわけでもなく、かといって殺処分するわけでもない。彼らが餓死するまで放置される。死を迎えるその瞬間までまともに生き地獄。なんとかならないものかと、ただただ呆然とし、言葉を失っていた。(中略) 最近ではこの「殺処分」という表現を「安楽死」に変えているとのこととすること。しかし、いくら表現を変えようとも同じ事だ。殺処分される豚を眺めながら人間とはつくづく勝手な生き物だと、本当に申し訳ない気持ちで胸が押しつぶされそうになった。

震災前、この警戒地域内には牛は約3500頭、豚は約3万頭いたが、しかし5月の調査では牛が1300頭、豚が200頭と餓死によって減少していた。そして生き残った動物達を今度は殺処分。



確かに家畜の多くはそもそも論として食用として殺されていく運命だ。しかし、その死と殺処分の死とは意味が違う。命のために命を頂いている。それが食べるといふ行為だ。しかし、あまりにも安易な殺処分

は命を命として扱っていないような気がしてならない。家畜の命を物としか扱えなくなってしまうたら、その考え方はいずれ同じ人間に向かっていくことになるだろうと、そんな事を感じながら現場を後にした。

今まで様々な現場に訪れてきたが、この現場は特に辛かった。正直、気持ち折れかけたかし、気持ちが折れてもそこに意味はない。嘆いている時間とエネルギーがあるのなら、何かをしたほうがいい。

高邑氏は20キロ圏内の世界を最も知っている政治家だろう。脱原発解散が噂され多くの議員は週末になれば選挙対策の為に地元に戻っている。そんな中、高邑氏はほとんど地元に戻る事もなくこの20キロ圏内へと向かう。このような政治家がいる事を一人でも多くの人に知ってほしい。

つい先日、高邑勉氏と「ファームサンクチュアリ」希望の牧場プロジェクトについて語り合った。警戒区域内の中で生き残った牛たちをどのようにして飼育していくのか。既に学者や研究者からも「被爆した家畜の成長過程などを調査したい」と声が上がっている。未だ政府は殺処分の方針を変えていないが、ならば民間の力でどこまでやれるのか、高邑氏や地元の酪農家の方々、そして学者、研究者の方々と意見交換を行いながらアクションを起こしていきたい。

2011.7.29

映画「ミツバチの羽音と地球の回転」鎌仲ひとみ監督作品

未来のエネルギーをどうするのか？

祝島とスウェーデンでエネルギーの自立に取り組む人々の物語

上映会 10月1日(土)開場13時より 上映13時15分(上映時間135分)その後5時まで鎌仲ひとみ監督とのトーク時間あり

高砂市生石研修センター多目的ホール(079-447-4110)

上映会を実りあるものとするために、あなたの実行委員会参加をよびかけます。

この3月11日の東日本大震災と福島原発の甚大な事故。この事故の影響は計り知れず、いまだに放射能は環境に放出され続け、周辺住民への経済的健康的被害に対する補償や環境回復への手立てなど今後も日本中をあげて取り組んでいかなければなりません。

最悪の事態が起こるまえから、核のサイクルが地球と共存できないものとして警告を発し続けてくれていた監督の仕事は、「ミツバチの羽音と地球の回転」では、希望の持てる未来の描き方について示唆していただいています。この映画から学ぶと同時に、今年は一歩進めて、私たちの地域での夢の描き方について上映会でも、一緒に考えていきたいと思っています。

そこで、上映実行委員に皆さんの参加を要請したいと思います。これらのことについて一緒に考えてみませんか？

さまざまな方向からいろんな意見をだしあうことで、私たちの住む地域でのエネルギーシフトの方法、方向、持続可能な生活の仕方への知恵・そんなことを交換できる上映会を作っていくために実行委員会を開いて、当日の運営について相談したいと考えています。参加いただける方は下記に記入して、送っていただくか、メールにて参加をお知らせください。

第一回実行委員会 8月27日(土曜日)2時~4時 場所 カトリック働く人の家

「ミツバチの羽音と地球の回転」上映東はりま実行委員会 連絡先 ピースチェーンはりま 山本(090-4496-2494)

脱原発東はりまアクションの会 菅野(079-421-2853) 宮寄(080-5319-8197)